第三百九十八回　青葉会

令和元年六月二十七日（木）午后一時半～四時半　文京区民センター会議室

〈選者〉
◎川口孤舟

〈出席者〉
今井紀久男　大林猛　柿崎忠彦　川口孤舟　在間千恵　豊田ゆたか　中野一灯
山内天牛
伊賀山そらお　久米五郎太　小早健介　朱牟田恵洲　土谷堂哉　古田昇　星田啓子
宮内規雄　山崎亜也　山田けい子　渡邊盛雄
赤田堅　安部眞希子　小西弘子　重枝孝岳（新人）　庄司龍平　高橋敏郎
早川允章　福島正明　松崎浩　村田くに子　山本三恵

〈投句〉

〈紙上選句〉

《互選句》

六点
◎いなきの潮風となる青岬　一灯（紀・孤・弘・ゆ・允・正）
五点
◎梅雨空や蘆に隠れる舫ひ舟　そらお（孤・允・く・天・三）
青蛙田面（おも）に音符生れけり　孤舟（猛・龍・敏・浩・三）
薄暑光盲導犬は眼閉ぢ　仝（忠・敏・ゆ・灯・三）
旅装解く夕べ雨音梅雨に入る　ゆたか（堅・紀・千・龍・く）
四点
◎稲の花飢饉に逝きし無縁墓　一灯（眞・孤・弘・敏・正）
チチチチと守宮（やもり）迎へる島の宿　昇（紀・弘・ゆ・浩・天）
◎涼やかな山伏案内（あない）の羽黒山　紀久男（孤・千・龍・浩）
霊山に法螺貝の音（ね）や雲の峰　孤舟（弘・灯・允・浩）
瀬をのぼる姿のままに串の鮎　仝（堅・猛・忠・千）
サングラス誰をも美女に仕立てたり　千恵（堅・龍・正・天）
◎ふるさとを湖底に沈め合歓（ねむ）の花　一灯（眞・孤・ゆ・允）
闇を突きほととぎすの声峡（かい）の宿　けい子（紀・孝・龍・敏）
三点
明易や旨寝（うまい）の途切れ身につらし　猛（忠・孝・三）
義太夫の声絞り出す暑さ哉　恵洲（紀・孝・允）
◎渓流の音に紛（まぎ）れず夕河鹿　一灯（猛・孤・敏）
火の島の椰子の浜辺の星涼し（バリ島）　昇（紀・孤・允）
花ござを出してもてなす老夫婦　けい子（弘・く・天）
非戦こそそれが償ひ沖縄忌　盛雄（眞・敏・ゆ）
二点
初夏早々救急チームに身を預け　紀久男（猛・忠）
（山形・鶴岡市の荘内病院）
原発の汚染ゆるゆる梅雨に入る　仝（正・く）
（浪江町・飯館村）
あけがたに手さぐりさがす夏布団　猛（孝・灯）
◎若竹や風に戦ぎて陽に揺れる　仝（堅・孤）
山登る園児リュックにてる坊主　忠彦（眞・灯）
宇宙へとホーキング読み明易し　仝（紀・天）
草取りを終へてサッパリ床屋行く　仝（紀・正）
待たされてあっと過ぎ行く鵜飼船　仝（正・天）
突き出しは渓流の音鮎の宿　孤舟（千・灯）
看護婦に髭を剃らるる芒種かな　五郎太（紀・弘）
焼け落ちし聖堂無残セーヌ夏　ゆたか（忠・灯）
（ノートルダム寺院）

◎梅雨ひと日モーツアルトのレクイエム　啓子（紀・孤）
紫陽花の色を違（たが）へて咲く不思議　仝（千・ゆ）
田植え済み富士の嶺（ね）映す田は鏡　仝（千・浩）
◎早苗田の緑に映ず空の青（日光）　亜也（紀・孤）
宝塚の夜（よ）のハイボール河鹿鳴く　盛雄（紀・天）
梅雨晴間漁港の昼は波もなし（三崎）　そらお（く）
傷癒（いや）す海辺の湯宿燕の子　紀久男（忠）
（山形・湯野浜温泉・亀や）
梅雨晴や予報士囃（はや）す洗濯日　猛（紀）
梅雨寒に長袖通し外歩き　仝（龍）
日に三度飽きない妻の筍飯　忠彦（天）
リストかけ眠りにはいる梅雨始め　五郎太（紀）
紫陽花や遺影微笑む別れ会　健介（く）
梅雨遅し席譲られて齢（よわひ）知る　仝（紀）
つゆめくや雨粒光り葉を揺らす　千恵（猛）
◎さくらんぼ行儀良きかな箱の中　仝（孤）
紫陽花のかすかに揺れて雨を待つ　恵州（堅）
我が朱夏の旅や結婚五十年　堂哉（眞）
暮れ泥（なず）む噴煙紅し籐寝椅子　仝（紀）
アルプスにまだ残る雪湖（うみ）涼し　ゆたか（三）
（季重なり）（スイス）
あでやかな牡丹散りしく雨夕べ　仝（浩）
縄紋の朱の耳飾り天の川　一灯（天）
亡妻との思ひ出の径花は葉に　規雄（紀）
田母沢に元号積りて夏に入る（日光）　亜也（三）
鵜篝（うかがり）の怪し恐ろし小瀬の里　けい子（紀）
夜なべしてニキロの辣韮漬け終へり　天牛（紀）
嫁くれる古風なお菓子父の日に　仝（紀）
雨水吸ひ汚れなき白七変化　盛雄（堅）

一点

＊　＊　＊　＊　＊

●次回青葉会
七月二十五日（木）　午后一時半～四時半　文京区民センター会議室
▲当季雑詠各五句　投句二句

☆第四百会記念句会
八月二十二日（木）　歌舞伎座第一部見物　十一時～十四時
仝　「花篭」にて祝宴＆句会十四時～十六時
ゲスト　巳之助ら三～四名
会費　ア寿（壱万円）（年会費未納者はお早目に）
十三名～十五名出席予定
当日出席される方は今井紀久男宛ご連絡下さい
（ＴＥＬ＆ＦＡＸ　０４２－４０１－５１０８）

以上　文責　紀久男

令和元年七月十七日

令和元年六月青葉会報

一　今回はゆたかさんら8名出席。投句は11名。千恵さん寄贈の純米「蓬莱」、小生の「久保田・千寿」、缶ビール、つまみを賞味し乍ら開会。猛さんの進行役で御覧のように一灯さん、そらおさん、ゆたかさん、昇さん、選者らが好成績でした。「俳句四季」6月号（孤舟さんの作品掲載。カラー二頁）「俳句あるふぁ」夏号、ウエブ句会江戸屋２００回記念文芸集「江戸の風になる」、アヴァンテイスタッフＯＢ会「今いい会」、庄内旅行の拙句と荘内病院長からのハガキを回覧しつつ４００回記念企画（句を詠む新橋芸者をゲストになど）や、天牛さんライフワークのプルタークの翻訳が完成（６０００枚）し、岩波から上梓を検討中などを話題にしました。

二　関係者近詠

蓋付の瓶へ幽閉桜貝　弘子
嬰児の肘にも笑窪花の昼　仝
また迷子からすのゑんど伸びてゐる　仝
晩年の肩存分に花浴ぶる　仝
未だ来ぬ神の一言万愚節　青史
味噌和の分葱の香りかがせやる　仝
甘茶仏縋れるならば何にでも　仝
花おぼろ抗生剤と白粥と　仝
　四代目三遊亭圓歌襲名
春風や名も改むる歌之介　紀久男

―「森の座」―　7月号

美化される思出話遠花火　正明
紫陽花や交渉上手といふ噂　仝
梅雨深く影絵のごとく大東京　允章
梅雨寒に淡きひかりの星座かな　仝
夏つばめ宿場の空をめつた切り　仝
逆さなる開聞凛と代田かな　堂哉
日盛りの道の静寂や武家屋敷　仝
夏場所の胡坐をかけぬ大統領　天牛
家居してにこごりになる梅雨じめり　丹野敦雄

三　水原秋櫻子の「芝居の窓」（東京美術Ｓ６１・５・２０）より夏の句を抄出してみました。

・・・（明治座・歌舞伎座の筋書より）

薄暑とて幕見は扇ひらめける
鳩（にお）浮巣近江源氏のあといかに（盛綱）
初松魚（はっがつお）市にいでけり舞台にも
　（髪結新三）
鮎鮨や吉野泊りは夜の長さ
維盛が鮓桶になふ葛の花
（「弥助鮓」は今もあり、小生の大阪時代同じ課の女性の実家で、課内旅行で食したことあり）
帷子に灯影で映ゆる伊勢音頭
祭着に団七縞の名ぞのこる
蟹ひとつ走りて梅雨の卒塔婆石（鬼界ケ島）
硝煙や兜捨てたる裸武者（大阪夏の陣）
祇園会の鉾もどよめく敵討

令和元年七月十八日

われなりの農事八十八夜かな　規雄

―「ＮＨＫ俳句」7月号　宇多喜代子選

竹の子の喜びそうな煙雨かな　仝

―「ＮＨＫ俳句」7月号　井上弘美選

大き枝にブランコ吊られ誰も居ず　允章
夕空や影の如くに鉄線花　仝
汗淋漓義太夫節も太棹も　恵洲
耄碌とふ容赦なき語や梅雨兆す　仝
大の字の大小孫と青芝に　仝

―　大鉄会　―　6月

手花火や母郷に残る数へ歌　盛雄
国捨てし難民憐れ蟻動く　仝
通学の安全願ふ夏帽子　健介
緑蔭や両手に慈愛の薬師像　仝
お洒落な父すべて銀座のパナマ帽　紀久男
口直しの水の美味しさどぜう鍋　仝

―「きさらぎ句会」―　6月

　市村雅博君を悼む
好漢逝く目礼献杯梅雨の通夜　紀久男

雨蛙三社祭もすぎければ
芝居見にさそはれし日ぞ更衣
もつれあひ影を一つに梅雨の蝶（夫婦善哉）
琴弾けば緑蔭深くむせぶ声（ビルマの竪琴）
朝顔や芝居にさそふ文きたり
冷房をいでて浜町の月下なり
獅子の出の笛すみとほる牡丹かな
藤娘見てうつくしき年わすれ
似顔絵の団扇手にせり夏芝居
夕立の川止せまる膝栗毛
夏雲の鬼形のままに暮れゆけり
船乗込まつやなびける夏柳

紀久男記